

町まで大川鐵道の軌道(蒸汽)が達し、柳河町から鹿兒島本線の矢部川停車場までは柳河軌道の蒸汽列車が敷設せられて此の近傍の交通循環路をなしてゐる。柳河町近傍の鰯は遠く京阪地方までも送り出されるとか、東京の柳川なべが、此處の地名から起つたのか何うか穿鑿するひまもなかつたけれども其處まで珍重せられる鰯も鰻と同様に鰯上りをやるものだ阿々。

僅か一週間で走り廻つた福岡縣内の現在開業軌道は、以上

十八會社の經營する延長二百六十一哩に上り、尙特許權を得てゐるものも可成りの延長を有し軌道の發達してゐることは全國第一位である。しかもそれが或る二三のものを除いては旅客、貨物の運輸に、道路交通の特殊機關として皆相當の効果を擧げつつある。軌道の興廢、振不振は其の地方の消長を卜するバロメーターであり且つ道路の改良と共に地方開發のピオニアである。私は以上の軌道を巡走して、層一層福岡縣の軌道否全国各地の軌道が道路の改良と共に隨所に振興せられむことを切望して止まない。

瀬田の唐橋から犀川大橋へ

枝 川 生

一 はしがき

かねて工事中であつた、二號國道滋賀縣瀬田、石山兩村立會瀬田川に架す瀬田橋と、十二號國道石川縣金澤市内犀川に架す犀川大橋の兩橋梁の架換其の功を終へ、前者は七月八日、後者は七月十日の各吉辰を卜し、夫れく盛大な竣功式が擧

行せられた。一は天下の名橋として夙に人口に膾炙するもの一は北越有數の大橋として是亦著名のものである。本稿は此の二大工事の竣工式に、内務大臣代理として臨席せられた丹羽内務書記官、牧野内務技師、道路改良會の都筑專任幹事と共に同式典に參列した折の旅日記の一節である。

二 都をあとに

索牛織女の兩星が一年に一度の逢瀬を樂しむ夕べ、東京驛に勢揃して、都を後に西下の旅に立つた。停車時間一分間といふ氣忙しい大津驛に着いたのは翌八日の午前十時、滋賀縣の小原土木課長、栗原技師の出迎を受け二臺の自動車に分乘して、直に瀬田橋の竣功式場にと向つた。一般に狹くらしい道路、而も國道筋の粟津の邊で、遞信省の地下線工事の爲、乗車の儘では通行の出來ぬ不便さに直面して、聊か心細かつた、橋の西詰石山村に入れば各戸は國旗、紅提燈の滿飾で全くのお祭氣分、對岸の瀬田村も亦これに劣らぬ歡喜振である。大橋と小橋とを結ぶ中島の綠蔭に憩ひて、ときの移つるを持つた。心地よく澄み渡つた湖國の空には雲の翳さえなく、唐橋凝寶珠の舊に變らぬ古典的な橋姿を、紺碧の流れに映して山紫水明とよく調和が保たれ、景趣更に一段の光彩を加へた感がある。橋の兩詰から、假橋や中島には此の日の盛典を見物に集まつた人達で立錐の餘地もない、其の数は萬を超へ、又船を浮べて水の上からの見物人も頗る多く、活動寫眞撮影技師は盛にハンドルを動かして居る、これ舉式に三十分前の光景であつた。

三 瀬田橋の竣功式

午前十一時、號砲の響と共に、縣當局を初め來復一同は、中島の中央に設けられた式場に入り、夫れ／＼の席に着き、祭典は型の如く極めて嚴かに執行された、小原縣土木課長の工事申告、末松滋賀縣知事の式辭に次で、内務大臣（代理丹羽内務書記官）縣會議長、滋賀郡長、道路改良會長（代理都筑專任幹事）其の他の祝辭朗讀及祝電の披露があつて、式を閉ぢ、一同は一橋の東詰にある、橋守神社に詣でた上、渡橋式に移り、末松縣知事を先頭に、丹羽内務大臣代理を初め縣當局者、瀬田、石山兩村に於ける一家三夫婦が三組即ち三家九夫婦が晴れがましくつゞき、尙兩村に於ける七十歳以上の翁媪二百七十餘名、何れも附添人に護られて渡橋、來賓一同之に次ぎ、蜿蜒長蛇の陣をつらねて先頭が西詰の石山村に達する頃まで續き正午過ぎ滞りなく式が終るや、東詰よりは青年團員、西詰よりは小學兒童が二列縱隊にて欣然と踏み渡りたる後、橋の兩袂に持ち構へた群衆は、東西より渡り初め見／＼橋の上は黒山を築いた。來賓一同は式後中島に設けられた祝宴場に集まり、祝盃を舉げた。午後一時からは橋の兩詰で餅まきが行はれ、又橋守神社では古例によつて、古橋板

で彫刻した惠比須、大黒の神像を神籤にて、參詣人に配與したので、終日非常な賑であつた。

四 大津から山中

式後の半日を、栗原技師の案内で、遊覽道路の目的を加味して改築せられた、石山の麓を瀬田川の清流に沿ひて、山城國宇治に達する府縣道の一部や、淀川の洪水量に重大な鑰を控る瀬田の洗堰や、大津市内の重要街路などを視察して、其の夜は大津の旅館竹清樓で寛いだが、翌九日の朝八時には、

大津驛の上りホームで米原行の列車を待つた、思へば慌しい旅である。汽車の窓から湖國の風光に盡きぬ名残を惜しみ、或は地圖を擴けて、小原土木課長や、栗原技師から道路改良計畫の概要を聴き、或は竣功近き十四號國道野洲橋の改築工事の實況を見て、能登川驛で途中下車し、既に改築計畫成つた、十四號國道筋愛知川に架す御幸橋及其の附近の道路を踏査して、道路の改良に熱心な縣當局に期待する所が多かつた。米原驛で栗原氏と別れて、汽車はいよく北陸線にはいつた。眞夏の炎熱に焼付く様な鐵路百餘哩を、暑さと、煤煙に惱まされつゝ、午後五時四十七分大聖寺驛に着き、宇垣石川縣技手案内で、温泉電氣軌道の一部を視察して、山紫水明の郷

たる山中温泉の、吉野屋別荘の玄關に靴緒を解いた。駒下駄に手拭ブラ下けて入湯に出かけたが、今の湯場では俚謠山中節に傳はる温泉情緒は偲ぶよしもない。白鷺の湯に一浴して汗をおとして蘇生の思がした。山中の夜は都の初秋に似た涼しさで、素肌では小寒い位だつた。柔い音調で高く低く、遠近の座敷から流れ出る山中節を、其の本場で聽て多少の感興を覺えたが、何だか活氣の乏しいのに物足らぬ氣もした。

五 嫁おどしの面

十日の早朝、露滋き蟋蟀橋の欄干に倚りて、深い淵から湧く涼味と、捨てがたき眺望を恣にした後、一同は牧野さんのカメラの前に立つた。朝食の膳に向つたとき、都筑さんの動議が成立して、吉崎御坊の嫁おどしの面を參觀することに一決したので、豫定の時刻を早めて宿を出た。此の面の由來に付ては廣く世に傳はる所であるが、近頃願慶寺と、西念寺の兩寺が、各其所藏の面を、互に眞正也と稱して、猛烈な争をやつて居るのは、何とした事だ、『眞正嫁おどしの面』は當山で御座るとの廣告？を相併べて建て、あるあたりは、黒焼屋の本家、元祖の争以上に笑止の沙汰である。而も何れか一方の面は鐵道省の公認とやら、運送屋の事ぢやあるまいし

事がいよく滑稽地味てくる。私達は願慶寺の門を入つた、通された一間で待つほどに、役僧のあらはれて、馴れた調子で玉手箱に似た墨塗の函に手を觸れたとき、一同は緊張した氣持で見詰めた、取出された面は、黒色のした一見恐しいものであつた、春日の作だとかで、單に一個の藝術品としても立派なものだと思つた。お手に取りて御覽下さいと勧められたが、何だか薄氣味悪くて躊躇した。切つめた行程を割いての事として、詳しい説明も聽かず、附近の古蹟等も探らずして大急ぎで大聖寺に引かへした。序ながら面の眞偽の詮索は別として此の邊を旅行せらるゝ方は一度は足を伸して、參觀するの價値は充分あると思ふ、そして佛力の偉大なることを思ふのは決して無益の業ではない。

六 大聖寺から金澤

大聖寺から金澤まで約八里、自動車を驅つて國道筋を視察した。道路の維持、修繕は相當行届いては居る様だが、貨物自動車などの高速重量車輛が通過する毎に砂塵が飛散して、行人人は固より沿道人家の迷惑は決して軽いものではない。これは獨り此國道に限らず、我國に於ける多くの郊外道路に見る現状ではあるが、近代交通用具の發達と、道路の利用が

日に滋きを加ふるとき、道路の改良が急務中の急務なることは、今更茲に贅するまでもない。安宅の町は國道筋から近いが、辨慶が勸進帳を聲高々と讀みあげた關跡は、遙か一里の沖合だときいては、訪れる氣も起らなかつた。松住町から金澤まで、國道に併行し又は國道を併用して走る、金澤電氣軌道松金線の客車には、『犀川大橋竣工式』云々と大書した廣告を掲げて、朝來多數の客を市内に運んで居つた。正午過ぎ金澤市内に入る、町並の整つたこと、唯工業の旺盛なことは流石に百萬石の舊城下として、又北陸の大都市としての名に恥ぢぬ、程なく車は、縁に包まれた石川縣廳に着いた。改築して間もない新廳舎の壯麗、整備、清潔な氣持よさに、バラック住ひの今日此頃と思ひ比べて、羨ましき限りであつた。擧式の時刻が迫まつたので、長官、内務警察兩部長、土木課長と共に車をつらねて、犀川大橋の竣工式場にと向つた。

七 犀川大橋の竣工式

犀川大橋は、文祿三年藩祖前田利家の創設に係り、金澤市内の目貫の場所に架けられた、北越有數の大橋で、兼六公園と共に其の名を知られたが、大正十一年八月の大洪水で、流失の厄に遭つたので、新橋は橋脚を用ひず、徑間二百呎のワ

Iレン型結構の永久的構造とし、其の面目を一新した、橋の兩詰正面の梁に高く掲げられた「犀川大橋」の扁額は、和歌山縣の長谷川長官が、本縣に在住の際の揮毫に係るものであつて、同長官が土木局長としての當時を偲び、懐しく仰ぎみ土橋の兩詰の片町及野町方面の街頭は見物人を以て埋め、河原や水中からの見物人も亦頗る多く、其の数は三萬以上と註された、猛夏の日盛りを物ともせず、汗にまみれて舉式を待つ人達の其の熱心さには一驚した。

八 歸 京

を三唱して一同祝盃を舉げた、又橋の兩詰に於ける餅まきを初め、角力其の他の餘興場は何れも盛況を極め、夜に入りては、大橋に電飾を装して美觀を添へ、河原では仕掛煙火などの催があつて、全市の人氣を集めて、祝の夜は賑やかに更けた。

午後五時市の公會堂を出た足で直に、日本三公園の一に數

午後二時、號砲と共に、縣當局を初め來賓一同は、盛裝をこらした新大橋の中央に設けられた式場に入り定め席に着き、祭典は型の如く嚴かに執行せられた宮島縣土木課長の工事報告、長石川縣知事の式辭に次で、内務大臣（代理丹羽内務書記官）縣會議長、金澤市長、道路改良會長（代理丹羽内任幹事）等の祝辭朗讀があつて式を閉ぢ、直に渡橋式に移り神官先頭に立ち、三夫婦、長縣知事、丹羽内務大臣代理を初め縣當局者、來賓一同之に次ぎ午後三時過ぎ滞りなく終つた午後四時からは市の公會堂に於て祝賀會が催され、出席者は五百餘名で盛會を極めた、席定まるや、長縣知事立ちて挨拶あり、丹羽内務書記官は來賓に代りて謝意を表し併せて道路改良の將來に對する希望を述べ、第九師團長の發聲にて萬歲

へられ、宏大、幽遠、人力、蒼古、水泉、眺望の六勝を悉く兼ね備はると稱せらるゝ兼六公園を逍遙して、瓢池、那智の瀑布に模した翠瀧、小堀遠洲の指畫に成るといふ夕顔亭を初め、盡きぬ景趣に旅情をなぐさめた。十一日の朝は旅に出て初めて寛だ氣持になつて、靈驗の顯なる那谷寺の觀音に參詣した、午後金澤に引かへし、重要街路や、軌道などを視察した後、物産陳列場にて、同揚長から縣内重要物産に付て詳しい説明を聴き、藩主前田齋廣の母堂隆子の柶穩せし成巽閣の參觀を最後として、同夜遅く金澤を出る列車で、鈴鹿峠に向はるゝ牧野さんを殘して、午後七時三十分發の急行で歸京の途につゐた。

× × × × × × ×

一週間に滿たぬ短かい旅ではあつたが、自分としては年來の望み叶つて、未知の北陸路に足を入れた喜びと共に、其の收穫も多く、一行の方々の逸話も亦豊富ではあるが、本稿は主として、盛大なりし瀬田及厚川の兩橋梁竣工式の紹介をかねた旅の筋書のみに止めることにした。又工事の概要に付ては、何れも縣當局から、夫れ／＼御發表の筈だし、本工事の效果に付ては、更めて書き立てる迄もなく顯著な事實だから共に省略することにした。尙兩竣工式に於ける、内務大臣の祝辭は左の通である。

祝辭

瀬田橋架換工事其ノ工ヲ竣ヘ本日茲ニ落成ノ式ヲ舉クルニ至レルハ邦家ノ爲寔ニ欣幸トスル所ナリ抑本橋ハ帝國幹線道路タルニ號國道ニ架設セラレ其ノ地風光ノ明媚ト相俟テ名聲夙ニ天下ニ著シキモ架橋年久シク其ノ構造今日ノ發達セル交通ニ適應セス遺憾尠カラサルモノアリシカ今ヤ精巧ナル技術ト多額ノ費用トヲ以テ架換其ノ功ヲ告クルニ至ル念フニ宏壯ナル新容ハ自然ノ美ト相俟テ今後益々内外ニ誇ルニ足ルヘク其ノ堅牢ナル構造ハ久シキニ亘リテ多大ノ效果ヲ及ホスモノアラム冀クハ其ノ維持管理ニ力ヲ致シ以テ

長ニ其ノ利用ヲ完フセラレムコトヲ一言所懐ヲ寄セテ祝辭トス

大正十三年七月八日

内務大臣 若槻禮次郎

祝辭

厚川大橋架換工事成ルヲ告ケ本日茲ニ竣工ノ式ヲ舉クルニ至レルハ邦家ノ爲寔ニ欣幸トスル所ナリ由來本橋ハ國道十二號線中ニ存シ重量ナル地位ヲ占メタリシカ不幸曩年洪水ノ爲流失ノ厄ニ遭ヒ地方交通ニ影響スル所尠ナカラサルヲ以テ縣當局ノ苦心ト縣民一般ノ協力トニ依リ改築ノ計ヲ樹テ年ヲ積ムニ費ヲ費ス二十六萬茲ニ功ヲ完フス其ノ結構ノ堅牢ナル將來再ヒ昔日ノ慘苦ヲ嘗ムルコトナカルヘク殊ニ幅員ノ擴張ト軌道ノ敷設トハ兩々相俟ツテ更ニ一般交通上ノ便利ヲ加フル愈大ナルモノアルヘシ冀クハ之カ利用ニ依ツテ今後一層地方産業ノ發達ト福利ノ増進トヲ促シ以テ長ニ其ノ效果ヲ收メラレムコトヲ一言所懐ヲ述ヘテ祝辭トス

大正十三年八月十日

内務大臣 若槻禮次郎